

# わがまち歴史散歩

じょうぜつ

## 饒舌な「文字史料」と寡黙な「考古資料」

### ○二つの異なる史資料

今回から6回にわたって、池田市域の持つ歴史的特質について、主として「考古資料」を使って紹介していきます。

ところで、歴史は、二つの性格の異なる史資料の分析をとおし、その総合的な研究によって明らかにされてきました。一つは、文字として残された史料「文字史料」、もう一つは、モノとして残された資料「考古資料」です。そこで、1回目となる今回は、「文字史料」と「考古資料」の違い、それぞれの有用性と限界についてお話しします。

### ○饒舌な「文字史料」

「文字史料」は、いつ、だれが、どこで、…、そして、中にはその結果によって現れる感情までと、過去のさまざまな事象について饒舌に語りかけてくれます。そこから導き出される内容は高い具体性を持っています。また、時代が新しくなるにしたがって、現在まで残る同時代の「文字史料」も飛躍的に多くなっています。

ところが、「文字史料」は、文

字が使用されるようになった時代以降に、文字を使用できるヒトが、文字として残す必要があると判断したコトのみが記録の対象となつていきます。つまり、記録の対象にならなかったことが抜け落ちてしまっていることになりました。また、同時代ではなく過去にさかのぼった内容や意図的な変化が加わることも想定されます。



写真左：「池田市娛三堂古墳（4世紀）出土文帯神獸鏡」、写真右：『日本書紀』（寛文9：1669年刊）。どちらも市立歴史民俗資料館蔵。

さらに、文字は、文字を刻む石や金属、あるいは書く木や紙といった媒体が必要になることから、いくつもの幸運が重なったことで、現在にまで受け継がれてきたものといえます。

### ○寡黙な「考古資料」

一方の「考古資料」は、人間社会が存在した限り、普遍的に見出すことができます。この点が「文字史料」と大きく異なるところです。つまり、人間のさまざまな行為によって生み出された全てのモノを対象にすることが出来ます。

何らかの目的を持って生み出され使用されたモノは当然のこととして、極端にいうと、生理的な行為の結果も含まれることになりま

す。例えばびろうなお話ですが、排便（糞石）排泄物が化石化したものも考古学的な分析の対象になっています。

しかも、そのモノが生み出された時代、つまり同時代の資料である点において大きな力を持つのです。むしろ、全てのモノが残るわけではなく、素材によっては長く残らないモノや、そもそも未発見のモノも存在しているはず

しかし、それを含めても、「文字史料」に比べその対象となる資料は余りあるものです。

ところが、多くの「考古資料」が残されていないが、それらは古墳に副葬された、あるいはごみ捨て場に捨てられたといった、その最終の姿でしか捉えることができません。なぜそのモノを必要としたのか、どのようにして作られ使用されたのか、それによってどのような結果が得られたのかといった過程については何も語ってくれない、寡黙な資料なのです。

### ○考古学のだいご味

このように、自分からはしゃべりだすことがないモノに何らかの方法を用いてしゃべらせようとするのが考古学といってもよいかもしれません。次回からは、いくつかのキーワードを設けて、自らはしゃべらない寡黙な「考古資料」を使って、「文字史料」として記録の対象にならなかった時代、あるいは事象に注目して考えます。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課

☎754・6674

# わがまち歴史散歩

## 旧石器時代：「道具」から復元される人びとの生活

### ○人びとを取り巻く 厳しい自然環境

日本列島で人びとの生活が始まったのは、今から4万年前にまでさかのぼるといわれています。それから、約2万5千年間、土器の使用が始まる縄文時代までの間を後期旧石器時代としています。

この時代は、寒冷な乾燥した気候で、平均気温は現在よりも7、8度低かったといわれています。北海道を除くと、草原とスギやマツなどの針葉樹林、コナラやハンノキなどといった広葉樹が含まれた針広混交林が広がり、今は絶滅したナウマンゾウやオオツノシカといった大型草食獣などが生息していました。

### ○残された人びとの痕跡

現在、後期旧石器時代の遺跡数は、全国で約1万、大阪府内では400余りで、後の時代と比べて最も少なくなっています。池田市内では、中国道池田―C付近に広がる宮の前遺跡や五月山南麓の伊居太神社参道遺跡など、5力所の遺跡が知られています。これらの遺跡は、北摂山地の南麓

に点在する遺跡群に含まれています。

時代が長いにもかかわらず遺跡数が少ないことは、人びとの生活の痕跡が残りにくいことに加え、後述するように移動生活をしてきたことにもよります。さらに、当時の日本列島の人口が2万人程度であったと推定されていることもその要因の一つです。

### ○想像を超える人びとの移動

後期旧石器時代では、獣骨や木を素材にした道具の使用も考えられていますが見つかるとはほぼ石器に限られます。その中で主体を占めるのがナイフ形石器で、槍の先に付けたり、切ったり削ったりと、狩猟に関するさまざまな場面で使用できる石器です。

道具の良し悪しは、素材と製作技術によって決まります。鋭利な石器を得るためには、それに適した石材が必要です。近畿地方で



ナイフ形石器(宮の前遺跡・歴史民俗資料館)



二上山遠望(大阪側から)

は、大阪府と奈良県の境にある二上山周辺だけで手に入るサヌカイト(安山岩の一種)が主として使われています。二上山周辺では、石器を製作した遺跡も見つかっており、製品、あるいは素材が移動していたことが分かっています。さらに注目すべきことは、共通の技術で石器が製作されていることです。すでにこの時代に、素材や製品はもとより、技術や知識が私たちの想像を超える範囲で人びとに共有されていました。

### ○道具と人びとの生活

ところで、私たちの生活にとって重要な役割を担っているのが道具です。どのような道具が、どのように使われていたかが分かれ

ば、人びとの生活を復元する手がかりになります。

この時代は、木の実なども食料にしていたと思いますが、植物を加工、調理する道具が見つかっていません。これは、食べることができない植物が限られていたこととも関連しています。このことから、当時の生活が狩猟を主体としたことが分かります。

また、狩猟の道具が槍に限られていることから、見つけやすく、動きが緩慢な大型草食獣が獲物として最適であったことになりました。大型草食獣は多くの食べ物を必要とするため、季節に応じて広大なエリアを移動しながら生息しています。すると、人びとはこれら大型草食獣を追う移動生活を送っていたということが導き出されます。当時の人びとが持った道具から、特定の獲物に絞った、効率の高い極めて合理的な行動が復元できるのです。市内の遺跡は、その移動途中に人びとが残した生活の痕跡であったのでしよう。

(市史編纂委員会委員・田中晋作)

◆問い合わせは社会教育課

☎754・6674



# わがまち歴史散歩

## 縄文時代：豊かな森の住民たちと土器の発明

### ○現代に近い環境へ

今から約1万6千年前ごろを境に、人々を取り巻く自然環境が寒冷で乾燥した大陸性気候から、安定した温暖で湿潤な海洋性気候へと変化し始めました。海面が徐々に上昇し、現在の日本列島の原形が形成され、植物資源の豊富な温帯落葉・常緑広葉樹林が広がるようになりました。私たちの住む猪名川流域でも、尼崎市域や豊中市域の南半分まで海が及んでいたことが分かっています。

### ○多様化した食料資源

この環境の変化は、それまでの人々の生活を根底から覆すような大きなものでした。森は、クリ・トチ・ドングリ・クルミといった植物資源やシカやイノシシといった動物資源を、大陸棚が発達し広大な干潟を生み出した海やそこに流れ込む河川は、魚介類といった水産資源をと、後期旧石器時代とは比べものにならない豊かで多様な食料資源を人々にもたらすことになりました。例えば、豊中市の穂積遺跡で発掘された縄文時代の海底跡で、80種

以上の貝の化石が足の踏み場もない状態で見つかったことも、その豊かさの一端を示しています。



縄文時代の海底から見つかった貝の化石  
(豊中市穂積遺跡：同市教育委員会提供)

後期旧石器時代の人々を、特定の大型獣を狩猟対象としていた「スベシャリスト」とすると、縄文時代の人々はこのような多様な食料資源を狩猟採集する「ゼネラリスト」と表現することができそうです。このような変化は、大型獣を追って広い範囲を移動することを余儀なくされた生活から、一定の範囲に定着する生活をもたらすことになりました。半地下式で暖房効率の高い竪穴式住居が生まれたのもこの変化に連動した現象の1つです。

### ○新たな道具の発明

縄文時代に現れた新たな生活

は、新たな道具を生み出しました。例えば、食料資源に関するものを見てみると、トチやドングリなどを、加熱や水さらしによって「あく抜き」をするための土器、森に生息する動きの早い中・小型獣を捕るための弓矢や、釣り針・網・モリ・ヤス、さらにヤナなどの狩猟具や漁労具などです。

また、道具ではありませんが、犬の出現も見逃すことができません。犬の活用によって、集団猟だけではなく個人猟も可能になりました。遺跡の中で見られる丁寧な犬の埋葬は、生活を共にする忠実な家犬であり、猟犬であったことを物語っています。

### ○土器の機能と人口の増加

ところで、日本の考古学では、縄文土器の発明をもって縄文時代の始まりとしています。土器は



縄文土器の出土状況  
(池田城跡：府教育委員会提供)

「あく抜き」だけではなく、煮沸調理を可能にした道具でもあります。煮沸する、この機能によって食材の範囲が広がるとともに、消化吸収を促進させるなど、縄文人に安定した食生活をもたらすことになりました。少し大げさな表現になりますが、土器が持った機能は、社会発展の基盤となる「人口の増加」への道を開いた、まさに時代を画する大きな発明であつたわけです。

### ○豊かな森の住人たち

縄文人たちは、自分たちを取り巻く自然環境を破壊しない限り、その恩恵を確実に得ることができていることを知っていたのでしょう。池田市域では、池田城跡などで縄文土器の出土が知られています。ある時は五月山の、またある時は猪名川の、さらにこれに続く海の恵みを得ることができたはずですが、環境の破壊と引き換えに得られた「現代の豊かさ」、豊かな森の住人たちに少し学ぶ必要がありそうです。

(市史編纂委員会委員・田中晋作)

◆問い合わせは社会教育課

☎754・6674

# わがまち歴史散歩

## 弥生時代：動かなくなること、動けなくなること



猪名川流域の弥生遺跡  
(『新修池田市史』第1巻137頁)

### ○農耕の始まり

稲作を中心にアワ・キビなどの畑作を複合させた食糧生産である農耕が、中国大陸から朝鮮半島を介して日本列島にもたらされたことを弥生時代の始まりとしています。その背景には、当時の気候の寒冷化が朝鮮半島南部から日本列島への「ヒト」の移動を促したことがあると考えられています。

現在のところ、前方後円墳が出現する3世紀半ばから後半までを弥生時代としています。始まりについては紀元前6世紀前後と、紀元前10世紀前後とする2つの説が対立しています。ここでは、前者の立場で進めたいと思います。

### ○自然環境の改変と道具

農耕の始まりは、自然と共生してきた縄文時代までにはなかった、開墾という自然環境の改変の始まりを意味します。現在に至る開発の原点がここにあります。

また、もたらされたのは、稲などの栽培植物だけではなく、田畑の耕作から、栽培、収穫、脱穀、調理はもちろんのこと、衣食住に関わるさまざまな知識や技術、そしてこれらを具体的な形にする各種の道具類が含まれています。その主役は木製品です。伐採から加工に至る過程には、朝鮮半島から持ち込まれた各種の石斧やさまざまな石器が使用されました。このような変化は、農繁期と農閑期

というサイクルからなる、近代化以前の日本の生活様式と農村風景を生み出すことになりました。

### ○資源をめぐる確執

生産性の高い稲作を中心とする農耕は、人々に安定した生活をもたらした反面、年間を通して集約性の高い労働を必要としたために、田畑に縛りつけられた動かなくなる、動けなくなる生活を強いることになりました。意外に聞こえるかもしれませんが、現在の都道府県・郡・市町村の原形がこの時代に出来上がったといっても良いと思います。また、継続的な農耕には、耕作地やかんがい施設などの維持、管理に組織的な協業が欠くことができないことから、生活の安定に伴う人口の増加とも相まって、集落や地域を統合して大型化していく社会の仕組みも生まれてきました。

朝鮮半島からの「ヒト」の移動はその後断続的に続き、あわせて青銅器、さらに鉄器と、より高い機能を持った多様な道具がもたらされることになりました。その中には、殺傷能力を持った金属製武器も含まれています。耕作地に適した土地や優れた金属製の道具は生産力の優劣に直結するもの

であり、例えば墳墓の副葬品にあられた格差は、これに限られた資源をめぐる確執が集団内のあるいは集団間の格差を生む要因になっていたことを示しています。

### ○猪名川を遡上して拡大する農耕社会

現在、本市域で見つかっている最も古い弥生時代の遺跡は、前期末(紀元前3世紀ごろ)の木部遺跡(木部町)です。猪名川流域では、下流域に木部遺跡に先立つて田能遺跡(尼崎市・伊丹市)や勝部遺跡(豊中市)が出現していることから、北部九州地域にもたらされた農耕は時を置かず東進し、これらの遺跡を起点にして猪名川を遡上して拡大していったことが分かります。中期(紀元前4世紀ごろ)には、石橋4丁目から住吉1・2丁目一带に広がる複数の小規模な集落から構成される宮の前遺跡が形成されています。対岸には大規模な加茂遺跡(川西市)が出現し、猪名川流域が複数の有力集団を核にして展開する本格的な農耕社会へと変貌していった過程を復元することができます。

(市史編纂委員会委員・田中晋作)

◆問い合わせは社会教育課

☎754・6674





# わがまち歴史散歩

## 古墳時代：古墳によって体现された社会秩序

図：猪名川流域の古墳の推移

| 地域<br>時期 | 伊丹台地                    | 長尾山丘陵      | 豊中台地                       | 待兼山丘陵      | 五月山南麓        |
|----------|-------------------------|------------|----------------------------|------------|--------------|
| 前期       | 上関塚<br>池田山              | 長尾山<br>万籬山 | 大石塚<br>小石塚                 | 待兼山<br>御神山 | 池田茶臼山<br>娘三堂 |
| 中期       | 伊居太<br>柏木<br>御願塚<br>南清水 |            | 大塚<br>御獅子塚<br>北天平塚<br>南天平塚 |            |              |
| 後期       | 園田大塚山                   | 勝福寺<br>中山寺 |                            |            | 二子塚<br>鉢塚    |

実線：墳丘形態不確定、破線：古墳であるか不確定

伊丹台地の勢力の伊丹・尼崎・猪名・古野の2つの勢力に集約されます。

左図に示したように、古墳時代前期（4世紀）には前方後円墳を築造することができた力を持った勢力が、猪名川流域とい

は、古墳からどのような社会像を描き出すことができるのかを、池田市域を含む猪名川流域を取り上げて紹介してみたいと思います。

### ○古墳時代の猪名川流域

3世紀半ば、大和盆地で巨大な前方後円墳が出現します。以後、約400年間にわたって、16万ともいわれる古墳が築造されました。これは、日本列島の歴史にあつて特筆すべき現象で、当時の社会像を描き出す極めて有用な手がかりになっています。

### ○古墳の出現

う限られた範囲に、少なくとも5つ併存していたことが分かります。これらの勢力のうち、長尾山丘陵の勢力が他の勢力に先駆けて力を持つようになり、それぞれ2世代程度、継続して古墳が築造されています。ちなみに、最大の豊中市大石塚古墳の規模が約90m、本市池田茶臼山古墳（五月丘1丁目）が59・5mで、当時としては中規模の古墳に当たります。

ところが、中期（5世紀）に入り、猪名川流域では大きな変化が起こります。前期に見られた長尾山丘陵・待兼山丘陵・五月山南麓の勢力では中期までに古墳の築造が停止または大きく後退し、猪名川を境にして東岸地域の豊中台地の勢力、すなわち豊中市桜塚古墳群東群と、西岸地域の

後期（6世紀）になると、東岸地域では古墳の築造が停止し、西岸地域でも後期前半（6世紀前半）に尼崎市園田大塚山古墳を最後に古墳の築造が停止します。一方で、ほぼ同じころ、中期に古墳の築造が停止していた長尾山丘陵で新たに川西市勝福寺古墳が築造されます。このように、後期前半の猪名川流域では、既存勢力と新興勢力の併存が注目されますが、共に後続古墳の築造が停止します。

その後、中期以降古墳の築造が停止していた五月山南麓で猪名川流域最後の前方後円墳である本市二子塚古墳（井口堂1丁目）が新たに築造され、後期後半または終末期（6世紀末～7世紀初頭）に、共に巨石横穴式石室を持つ本市鉢塚古墳（鉢塚2丁目）と宝塚市中山寺古墳（中山白鳥塚古墳）が出現します。

以上のような古墳の推移から、猪名川流域では最終的には東西両岸地域がそれぞれ一つの有力勢力のもとにまとまっていく様子を見て取ることができます。とはいえ、その道のりは特定の有力な勢力が継続して成長を遂げていくといった平坦なものではなかったようです。

### ○政権交替に連動した動静

ところで、古墳時代にあつて時期別に最大規模を持つ前方後円墳を並べてみると、天理市大和・柳本古墳群→奈良市佐紀古墳群→堺市百舌鳥古墳群、藤井寺市・羽曳野市古市古墳群→高槻市今城塚古墳→橿原市五条野丸山古墳という順序で移動しています。この現象をやマト政権内で主導権の交替があつたことを示すものとする考えがあります。それぞれの移動時期を見ると、猪名川流域で見た古墳の動静と合致することが注目されます。あくまでも一つの仮説ですが、政権内の主導権の交替が猪名川流域を含む各地域の勢力の推移と連動していたことを導き出すことができそうです。

私たちが池田市内で目にする古墳は、市域や猪名川流域で完結するものではなく、この地域が古墳によって体现された当時の社会秩序の中に組み込まれていたことを物語っているといってもよいでしょう。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）  
◆問い合わせは社会教育課

☎754・6674

# わがまち歴史散歩

## 日本列島が初めて経験した大規模な技術革新の時代

### 「モノ」の移動から 「ヒト」の移動へ

古墳時代に入ると(3世紀半ばないし後半)、当時の日本列島にはなかった高度な技術で製作されたさまざまな器物(「モノ」)が中国や朝鮮半島からそれまでも増して数多くもたらされるようになりました。中期(5世紀)を前後する頃からは、最新の技術や知識を持った渡来人(「ヒト」)の移動がこれに加わります。

豊中市上津島遺跡や利倉西遺跡、川西市栄根遺跡などで、5世紀半ば以降の朝鮮半島系の土器が見つかっています。この頃までには、猪名川流域でも渡来人が加わった集落が営まれていたようです。近い将来、池田市域でもその痕跡が見つかる可能性が高いと、個人的には思っています。

### 各種生産の専門化と 渡来人

生産の形態も弥生時代と大きく変わります。武器や農具といった鉄製品、須恵器や塩、さらに馬といった各種生産が専門化されたことです。こ

れを可能としたのが、最新の技術や知識を持った渡来人です。ヤマト政権やこれを支えた有力勢力は、渡来人を組織化することによって計画的な生産地配置を行い、素材から製品供給までを独占することになりました。

例えば、それまで日本列島になかった大容量の液体を入れる須恵器の大甕の場合、素材



和泉市濁り池窯跡(日本列島で最も古い須恵器窯の1つ)  
写真提供: 田中英夫

となる粘土、成形に必要な豊かな水、窯を築くのに適した地形、燃料となる木材、製品の搬出路となる河川という条件を備えた大阪南部の丘陵地帯が生産地として選定されています。ここに、須恵器の生産技術

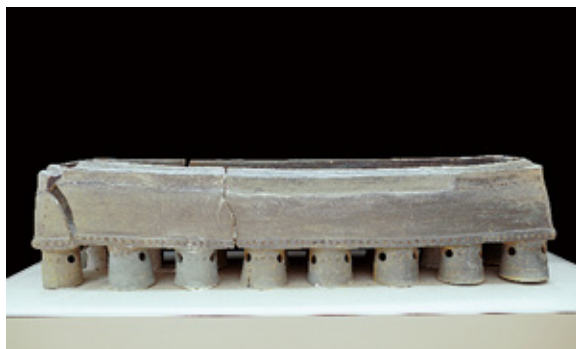
を持った渡来人を配することによって大量生産が可能になりました。

### 製品の規格化と 生産地の拡散

このような生産の専門化は、さらなる需要を生むことになりました。これに対応できたのが製品の規格化です。規格の存在は、生産に従事する人びとの間に大きさや量などに関する一種の単位が共有されていたことを示しています。当時の社会がさまざまな製品に求めた機能は、同一の規格を持つ製品として現れ、生産の拡大と生産地の拡散によってその需要を満たしていくことになりました。

5世紀後半以降、大規模な須恵器生産を行っていた桜井谷窯跡群が豊中市北部から箕面市にかけて広がっています。規格の統一と生産地拡散が、大阪北部の丘陵地帯で始まった1つの事例です。また、本市にある五月ヶ丘古墳(五月丘1丁目)は、7世紀に造られた古墳ですが、破格の大きさを持つ、須恵器と同じ手法で作られた焼き物の棺(陶棺)が納められていました。

その被葬者は、渡来人の血を引く、あるいは須恵器生産に関与した人物であった可能性が考えられます。生産の拡散に伴う1つの事象として捉えることができるかもしれません。



五月ヶ丘古墳出土陶棺

古墳時代は、巨大な前方後円墳が造られた時代であり、これも1つの時代像といえますが、社会全体が大きな飛躍を遂げた、まさに日本列島が初めて経験した技術革新の時代という表現の方がその実像に即しているのではないかと考えています。

(市史編纂委員会委員・田中晋作)  
【問合せ】社会教育課

☎754・6674



## わがまち歴史散歩

## 戦没者の顕彰と地域の歴史

旌忠記念碑<sup>せいちゅうきねんひ</sup>の建立

五月山公園の一角には、現在も碑面いっぱい、大きく「旌忠記念碑」と彫り込まれた石製の立派な記念碑が立っています。『新修池田市史』第3巻では、『豊能郡報』を典拠として、日清戦争後の明治34（1901）年4月、当時の相場駒次豊能郡長が池田町内にある豊能郡役所の北方小高い所に建立したもので、「国家のため忠死せし人の英魂を慰めん」として年々祭典を行い、遺族に喜んでもらうためにと説明しています。

さらに、この旌忠記念碑には、豊能郡（現在の豊中市・池田市・豊能町・能勢町の区域にほぼ該当）全域に関わって、戊辰戦争（明治1～2年）での戦死者1人、西南戦争（明治10年）での戦死者5人、そして、日清戦争（明治27～28年）とそれに続く「清国台湾守備中」の死者26人の「義魂」を合祀<sup>ごうし</sup>するとも記されています。

現在の池田市域については、西南戦争で北豊島村村田辰蔵、池田町山本弥助の2人、日

清戦争とそれに続く清国・台湾守備中では、池田町丹波義松・横田朝七の2人が合祀されるとされています。ただし、これら氏名などは、現在碑面を見ても見当たりません。もっとも刻まれていなかったのかもしれない。



旌忠記念碑

池田と  
西南戦争戦没者

西南戦争では、明治10（1877）年2月中旬から9月下旬まで熊本県をはじめ九州各地で西郷軍側と官軍（明治政府）側とが激しく戦いました。

西郷軍側は、鹿児島県士族を中心に1万数千人以上とか、2万人以上。一方、官軍側は、徴兵制度に基づいて全国から集められた兵隊を中心に約6万人、戦没者は6千人を数えました。

現在の池田市に属する地域は政府が統治しており、ここに住んでいた人々は官軍側に組み込まれていたことは間違いありません。比例計算してみると約20人の若者が動員されたこととなります。旌忠記念碑で記録された2人の死者はそれの中から出てきたのです。

一方、西郷軍側に付いた人はいたのでしょうか。もし、いたとすれば興味深いことです。が、何も分かってはいませんが、ただ、彼らは「賊軍」となりま

すから、この記念碑に合祀されることはなかったでしょう。ところで、市内の墓地には西南戦争での死没者の墓はあるのかどうか。現在では何も分かっていません。これはなぜなのでしょう。

## 地域と戦没者

明治の陸軍創設期、大きな戦争はなかったのですが、怪我や病気で死去する軍人はたくさん出ていました。陸軍は遺体を埋葬し、毎年、日を選んで靈魂を慰め、鎮める招魂祭を催しました。当日は大勢の市民が賑々しく陸軍墓地に

集まりました。しかし、陸軍は死者を褒めたたえ、顕彰しようとはしていませんでした。西南戦争で戦死していても、当初は特に重視されることはなかったのです。

そうした中、明治16（1883）年、西南戦争での官軍戦勝を記念する立派な明治紀年標が大阪中之島に建造されます。官軍をたたえ、戦没軍人を顕彰する方向がここにはっきりと示されます。また次に起きた日清戦争では、遺族は郷里に立派な個人墓標や記念碑を建てていきます。戦没者の顕彰という国家の意思を地域で支える構図がこうして徐々に出現していくのです。

五月山公園に今も立つ豊能郡の旌忠記念碑も、このような国民の意識変化の中から生み出されたと見るべきでしょう。



桃園墓地忠魂碑

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）  
問合 社会教育課

☎754・6674



## わがまち歴史散歩

## 北摂源氏物語

## 摂津源氏と河内源氏

6年のNHK大河ドラマは、

『源氏物語』の作者・紫式部が主人公です。『源氏物語』の主人公・光源氏は桐壺帝の皇子として生を受け、人臣となつて最高位の太政大臣に昇ります。源氏とは、そもそも姓を持たない王家がその身分を離れて臣下となる臣籍降下する際に、源氏の姓を天皇から賜った一族です（賜姓源氏）。創作の光源氏も、現実の武家源氏に連なっていく経基王（清和天皇孫）も、賜姓源氏なのです。

清和源氏の子孫に、征夷大將軍となる源頼朝や足利尊氏、戦国時代の武田信玄（甲斐源氏）や明智光秀（美濃源氏の土岐氏一族）がいます。徳川家康は、真偽はともかく、清和源氏の新田氏の子孫を自称しました。

頼朝の先祖をたどると、河内国に拠点を置いた源頼信（河内源氏）にさかのぼり、さらには摂津国多田（川西市多田）の源満仲・頼光父子に行き着きます。多田神社は將軍家の尊崇を受け、足利將軍の遺骨が分骨され、徳川家綱が社殿を復興しています。ちなみにJR川西池田

駅の騎馬像（左写真）こそが満仲であり、川西市の施設「みつなかホール」は満仲に由来します。



源満仲騎馬像

## 摂関家と摂津源氏

清和源氏の初代・経基は「いまだ兵の道に練れず」（『将門記』）と武人としては未熟でしたが、運も手伝って平将門・藤原純友の反乱（承平・天慶の乱）の功労者として朝廷内で処遇されます。摂津源氏は息子の満仲と孫の頼光の代に、藤原氏と結びつくことで軍事貴族として確立していきました。

安和2（969）年に藤原北家が政敵の左大臣源高明を失脚させた安和の変では、満仲が高明の謀反を密告し、摂関政治の確立に寄与しました。さらに寛和2（986）年に花山天皇が出家し、一条天皇が即位して外祖父の藤原兼家（道長父）が摂政となりますが、藤原道兼（道長兄）にだまされた花山を元慶寺まで連行したのは満仲一族でした。満仲は多田を

拠点に据え、多田院を建立して、摂津源氏の祖と称されました。

そして頼光は、権勢を伸ばしていく道長側近として、受領（国司）を歴任して蓄財し、内蔵頭を兼任し昇殿を許されます。寛仁2（1018）年に再建された道長の土御門邸には、頼光から豪華な調度品の数々が贈られ、人々を驚かせました。ちなみに満仲の三男が頼信で、次男の頼親の子孫には「豊嶋」を号する者が散見します。頼親の系統は大和源氏と称されるも多田に近い豊島郡（池田市全域と豊中市・箕面市の大部分、吹田市の一部）にも所領を有したと考えられます。

## 鬼滅の頼光

頼光は摂関政治の安定の下、武士としての実績はほとんどありません。にもかかわらず、頼光は妖怪・鬼神などの邪悪を撃退する超人的な人物として描かれるようになります。小林一三が収集し、現在は逸翁美術館が所蔵する国の重要文化財「大江山絵詞」（下写真は、頼光と腹心の四天王が酒吞童子を退治する物語絵巻です。

酒吞童子とは、大江山にこもり、都の子女を誘拐して血をす



「大江山絵詞 下巻」より鬼の首を獲る場面※  
（公財）阪急文化財団 逸翁美術館蔵

すり人肉をむさぼる鬼とされます。大江（大枝）山は山陰道の山城・丹波の国境（現・京都市西京区と亀岡市の間）に位置し、感染症が京都に侵入する入口であり、頼光には王都の清浄を保ち王権を守護する、武家政権の理想が投影されています。美術史学の成果によれば、『大江山絵詞』の成立は室町初期とされます。南北朝内乱を通じて政権を確保した足利將軍家によって、京を守護した頼光の実像は偶像化・神格化されていったと考えられています。ちなみに多田神社には、頼光が酒吞童子の首を切った「鬼切丸」が源家伝家の宝刀として伝えられています。

（市史編纂委員会委員・松永和浩）

問合 社会教育課

☎754・6674



## わがまち歴史散歩

## 日本ウイスキー 100 年史と北摂

## 日本ウイスキー誕生

今から100年前、大正13(1924)年12月に日本ウイスキーの最初の一滴が、北摂の山崎蒸溜所(島本町)で滴り落ちました。「赤玉ポートワイン」のヒットを元手に本格ウイスキー事業に進出した寿屋(現・サントリー)の鳥井信治郎と、本場スコットランドに留学した日本人初の蒸留技師の竹鶴政孝(ニッカウヰスキー創業者)の2人による偉業です。

日本ウイスキーは世界5大ウイスキーに数えられ、21世紀の世界的コンペティションで、サントリーやニッカに限らず多数の銘柄が世界一の栄誉に輝いています。最近では海外オークションで驚くほどの高額で落札されるなど、世界的に人気が高まっています。

しかしその出発は、苦難の連続でした。ウイスキーは原酒を長期間貯蔵し、貯蔵年数の異なる原酒をブレンドして製品化するため、時間と資本を要します。操業開始から原料が搬入されるばかりで製品が出荷されないため、山崎工場には「ウスケ」という麦を食う化け物が住

んでいるとのうわさが立ったほどです。ようやく昭和4(1929)年に発売された最初の国産ウイスキー「白札」は、スコッチ特有のスモーキーな香りで敬遠されました。そのてん末は、NHK朝の連続テレビ小説「マッサン」(平成26年度)に描かれました。

生来の嗅覚とでっち奉公で磨いたブレンド技術で「赤玉」を開発した信治郎は、自らウイスキーのブレンドに乗り出します。山崎からあらゆる原酒を雲雀丘の自宅に持ち込んで商品開発に没頭し、昭和12年発売の「角瓶」がようやくのヒットとなりました。

なお、信治郎は大正10年ごろに池田町満寿美、翌々年に雲雀丘住宅に転居しました。明治43(1910)年に箕面有馬電軌(現・阪急電鉄)を開通し、沿線の室町住宅(現・池田市室町)を開発した小林一三の娘は、信治郎の長男と婚姻しています。

北摂で育った  
佐治敬三

寿屋は、戦時中は海軍、戦後は米軍にウイスキーを納入し、米軍兵士用の銘柄を「トリス」

として発売しました。「トリス」はキャラクターのアンクル・トリス、キャッチコピー「人間らしくやりたいナ」、PR誌『洋酒天国』などの宣伝も手伝って、戦後のウイスキーブームをけん引し、日本に「洋酒のある生活」を定着させました。



現・阪急石橋阪大前～蛸池駅間に設置された9×15mの野立看板(昭和34年)

寿屋宣伝部を率いた信治郎の次男・敬三(1919～99年)は幼少期から北摂で育ち、池田師範学校附属小学校(現・大阪教育大学附属池田小学校)に通い、佐治家の養子となった後も雲雀丘の鳥井家で生活し、海軍から復員して寿屋に入社します(詳細は「市史編纂だより」第89回)。

敬三は昭和36(1961)年

に社長とマスターブレンダーの地位を父から引き継ぎ、名実ともにウイスキー製品の最高責任者となります。ちなみに昭和38年のビール事業参入を機に、社名をサントリーに変更しています。

スコッチを理想としたニッカに対し、敬三は日本独自のウイスキーを追求しました。香味豊かで調和のとれたウイスキーをめざし、昭和47年には水割りや和食と合わせる「二本箸作戦」を展開しています。敬三が手がけたシングルモルト「山崎」(1984年発売)、高級ブレンド「響」(1989年発売)は、ジャパニーズ・ウイスキーの一つの方向性を示しました。



和風店向けの水割りセット(二本箸作戦)

※画像はいずれもサントリーホールディングス(株)提供。

(市史編纂委員会委員・松永和浩) 問合せ 社会教育課

☎754・6674

## わがまち歴史散歩

## 北摂平家物語

## 幻の「鶴越の「坂落し」」

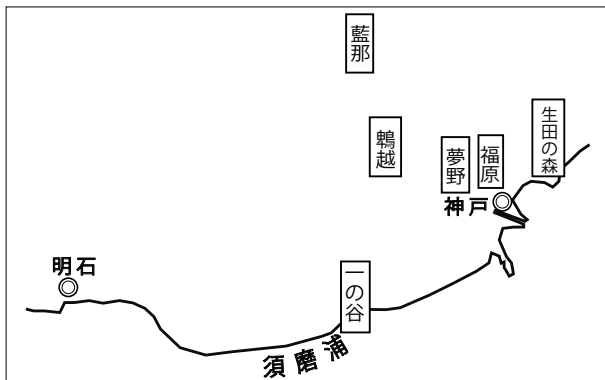
都落ちして一の谷に陣取る平氏軍。背後の崖から源義経率いる騎馬武者が急襲。驚き慌てた平氏軍は船で退散。

『平家物語』でも印象的な戦闘シーンの一つで、源義経の天才的戦術が発揮された、一の谷の合戦、鶴越の「坂落し」です。その後は屋島、壇ノ浦と平氏を滅亡に追い込む、重要な戦いでもありました。しかし、実際の戦闘とは様相が異なるようです。寿永3（1184）年1月に

木曾義仲を破って入京した鎌倉軍は翌月、福原（神戸市兵庫区）の平氏を挟撃すべく、大手の源範頼（義経兄）が東から山陽道を進み、からめ手の義経が丹波路から印南野を経て西から山陽道に入ります。同時代史料によると、東は生田の森（同市中央区）で範頼が、西は一の谷（同市須磨区）で義経が、北は山の手の「城郭」（福原）で摂津源氏の多田行綱が交戦し、「城中」の平氏軍が総崩れとなりました。

実は行綱が福原に迫った「山の手」こそが鶴越で、三木（三木市）から夢野（兵庫区夢野）・

兵庫津を結ぶ山中の間道を指します。行綱はからめ手軍の別働隊として鶴越から平氏軍本隊を叩き、勝利に導いたのでした。合戦後、義経は京都に帰還し、からめ手軍総大将として行綱の軍功も自らの手柄と語ったのかもしれませんが。その情報を基に、地理感覚に疎い『平家物語』の作者が約8キロメートル離れた一の谷と鶴越を同一空間のように描いたと考えられています。実態からいえば、「生田の森・一の谷合戦」と呼ぶのが妥当なのです。



生田の森・一の谷・鶴越近隣図（川合康「生田森・一の谷合戦と地域社会」2012年）から作成

## 「裏切り者」多田行綱

この合戦以前、行綱は本拠地の多田荘（川西市）と京都を往来しながら、院や平氏の下で活動していました。『平家物語』が描く安元3（1177）年の「鹿ヶ谷事件」では、後白河院による平家打倒の謀議を行綱が平清盛に密告したとされますが、右の事実から否定的な見方が有力です。

一方で、「以仁王の令旨」を旗印に治承4（1180）年に平氏打倒を呼びかけ挙兵した同族の源頼政や、義仲・頼朝に対しては冷淡でした。福原や清盛領の山田荘（神戸市北区）と京都の間、昆陽野（伊丹市）や河尻（尼崎市）などの摂津国川辺郡の水陸交通の要衝を勢力圏に置く行綱は、平氏としても敵に回したくない実力者と目されていました。

行綱は都落ちの直前になってようやく平氏を見限ります。生田の森・一の谷合戦では、摂津国惣追捕使（守護）として豊嶋太郎源留ほか摂津武士を動員し、地元の実情を踏まえ平氏に不満を持つ在地武士を「案内者」に立て行軍しました。合戦

での勝利に、行綱の実力がいかに発揮されたのです。

しかし「走狗煮らる」。平氏打倒を果たした頼朝は、この先の脅威となり得る勢力の排除に乗り出し、奥州藤原氏もろとも義経を滅ぼします。行綱も元暦2（1185）年に頼朝から追放され、後任の惣追捕使の大内惟義が多田荘・多田院御家人の支配を継承しました。行綱は頼朝の歓心を買うためか、頼朝追討を唱えて京都を退去した義経を、河尻で豊島冠者とともに襲撃します。しかしそれも空しく行綱は没落し、摂津源氏の正統は途絶えることとなりました。



弁慶の泉（市指定文化財）  
行綱らと交戦した弁慶が喉の渇きを潤したとの伝承が残る

（市史編纂委員会委員・松永和浩）

問合せ 社会教育課

☎754・6674